

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H01512

研究課題名（和文）主観的健康感を向上させる「ガイド付きまち歩き」のための場所の文脈情報の編集技術

研究課題名（英文）The Editing Techniques for Contextual Information of Places for "Guided Walking Tour" to Improve Subjective Well-being.

研究代表者

後藤 春彦（GOTO, Haruhiko）

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：70170462

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、場所の文脈情報を解説しながら歩く「ガイド付きまち歩き」に着目し、そのための場所の文脈情報の抽出、編集、共有のための技術開発と普遍化をおこなった。「ガイド付きまち歩き」の有効性の検証実験から、まち歩きは気分状態を改善させる、ガイド付きまち歩きがガイド無しまち歩き以上に気分状態を改善させることが明らかになった。以上から「ガイド付きまち歩き」が「主観的健康感」の向上に寄与することが示された。また、主観的健康感と空間認知の調査から、主観的健康感が良い回答者の居住地周辺の主観的認知度が比較的高いことが明らかになった。これらをふまえ、文脈情報を発信しやすい都市デザインのあり方を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まち歩き・ガイド付きまち歩きは、地域社会においては、景観形成や観光振興等で着目される傾向にあったが、本研究では、社会的健康に寄与する「場所」を生産する計画技術・計画手法として、特に、ガイド付きまち歩きが気分状態の改善に有用性があることが示された。本研究は、Well-beingへの社会的関心が集まる中、居住地周辺環境の主観的認知度を高めるためのまち歩き、及び、ガイド付きまち歩きの設計や、そのための文脈情報を発信しやすい都市デザインの基礎となる研究である。

研究成果の概要（英文）：This study tried to find the method of extracting, editing, and sharing contextual information of places for "town walking tour with guide". Through experiments conducted on town walking tour, it was revealed that: Town walking enhances mood states. Guided walking tours significantly enhance mood states compared to tours without guides. As a result, it was demonstrated that "guided walking tour" contributes to improving subjective well-being. Furthermore, surveys on subjective well-being and spatial cognition highlighted that individuals with higher subjective well-being tend to have greater awareness of their residential surroundings. Drawing from these findings, the study explored which kind of urban design can enhance individuals' perception of contextual information about places.

研究分野：都市計画

キーワード：まち歩き ガイド付きまちあるき 主観的健康感 社会的健康 場所の文脈 ウェルビーイング 環境認知

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今日、Well-being への社会的関心が集まる中で、「主観的健康感」が生命予後に及ぼす影響の解明が医学分野で進展しており、健康寿命の延伸に向けて、主観的健康感を維持向上させる要因に対する介入研究が多数試みられている。Well-being への寄与および主観的健康感に関する研究は、医学分野に限らず生活環境に関わる分野横断的な研究体制の構築が必要である。加えて、COVID-19 終息後の成熟社会において、建築・都市計画学が果たすべき役割として「社会的健康」への貢献が挙げられる。

以上の問題意識に立脚し、本研究は、社会的健康を下支えする空間として「場所」の概念を再構築するとともに、社会的健康に寄与する「場所」を生産する社会技術の開発と社会実装を目指す。特に、本研究では主観的健康感と場所の文脈に関する解説を受けながらまちを歩く「ガイド付きまち歩き」に着目する。

これまでに、研究代表者はガイド付きまち歩きが参加者の精神的疲労を回復させること、被験者の空間認知量(要素数)は、主観的健康感の高低と相関することを明らかにした。この成果を受けて、まちの文脈を編集し共有するノウハウが蓄積されたガイド付きまち歩きは、参加者の空間認知量を増やし、精神的疲労の回復のみならず、主観的健康感の向上に寄与するとの研究仮説のもと、以下の研究を進める。

2. 研究の目的

本研究では、まちの文脈を編集し共有するノウハウが蓄積された「ガイド付きまち歩き」は、参加者の空間認知量を増やし、精神的疲労の回復のみならず、「主観的健康感」の向上に寄与するという研究仮説に基づき、主観的健康感を向上させる「場所の文脈情報の抽出、編集、共有」の技術開発と社会実装を行い、その有効性の検証を通じて、「場所に根ざす社会的健康」を実現するための社会技術の獲得に取り組む。具体的には、「目的 1: 場所の文脈情報の抽出、編集、共有のための技術開発と普遍化」「目的 2: 「ガイド付きまち歩き」の有効性の検証」の 2 点をふまえ、「目的 3: 文脈情報を発信しやすい都市デザインのあり方の提言」を研究の目的とした。

3. 研究の方法

目的 1 については、文献資料やヒアリングから情報を収集し、整理分析を行った。目的 2 については、ウェブアンケート調査、文献資料から情報を収集し、整理分析を行った。また、まち歩き実験を行い、被験者から得られた情報を分析した。目的 3 については、ウェブアンケート調査より情報を収集し、目的 1・2 の内容をふまえて整理、分析した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果—目的 1: 場所の文脈情報の抽出、編集、共有のための技術開発と普遍化

○ 対象地選定と場所の文脈情報の収集

研究当初は、場所の文脈情報が比較的豊富だと見込まれ、ガイド付きまち歩きの実施に適していると想定していた歴史的市街地として、奈良県橿原市今井町地区を調査対象としていたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い長距離の出張や長期滞在が難しくなった。そのため、対象地を埼玉県越谷市旧日光街道越ヶ谷宿エリアに変更した。この対象地は、旧日光街道および奥州街道の宿場町「越ヶ谷宿」として栄え、長らく地域の中心となってきた。また、近年は民間企業 P 社による歴史的建造物の保存など、歴史的環境の継承がなされているといった点から対象地として適切であると判断した。

場所の文脈情報の収集として、市史や地域誌、雑誌、新聞といった文献資料の収集と内容の確認を進めた。また、歴史的建造物の保存活用やまちづくりに取り組む民間企業 P 社や地元事業者・まちづくり団体等の協力を得、歴史資料や暮らしに関する情報等の提供を得た。

○ まちづくりオーラル・ヒストリー調査

文献資料からは、災害や祭礼行事等、地域にとって大きな出来事に関する内容であった。より地域住民の生活実感・日常の暮らしに近い情報を収集するため、まちづくりオーラル・ヒストリー調査に着目した。まず、まちづくりオーラル・ヒストリー調査の内容と手法を整理した。その上で、越谷市旧日光街道沿いでまちづくりオーラル・ヒストリー調査を、民間企業 P 社および地元住民と連携し実施した。結果として、地域住民の暮らしの実態や記憶に結びついた文脈情報の収集が達成できた。

また、本研究代表者が同時期に実施した首都圏郊外の集合住宅団地におけるまちづくりオーラル・ヒストリー調査の内容と比較検討すると、両地域共に地域住民の場所と結びついた記憶が抽出されている点は共通性がみられるものの、歴史的市街地であり商店が多い越谷市旧日光街道越ヶ谷宿エリアの方がより多様な文脈情報がみられた。

○ 技術の普遍化の検討

これまで述べてきた、文献資料やまちづくりオーラル・ヒストリー調査の内容から場所の文脈情報を抽出するとともに、ヒアリング方法や調査時・編集時の地図や写真の使用といった、対象地の場所の文脈情報の疎密に合わせた情報の抽出・編集・共有手法について有効性と課題を検討

した。また、適宜社会学や文化人類学におけるフィールド調査の手法を参照しながら、より普遍的な技術化を検証した。

(2) 研究の主な成果—目的2:「ガイド付きまち歩き」の有効性の検証

○ ガイド付きまち歩きと主観的健康感の把握と分析

ガイド付きまちあるきの具体的内容について、先行研究や実施報告書より、まち歩きの頻度、行動要因、関心を持つ場所といった、まち歩き時の居住者と場所の関係を抽出する手法を整理した。加えて、健康習慣、孤独感、心の疲労感といった健康感に関する指標を整理し、主観的健康感を測る要件を把握した。これらをもとに、ガイド付きまち歩きと主観的健康感の相関を計測するデータを得るためのアンケートの設計とその分析手法を開発した。そして、本研究の対象地を含む首都圏郊外1都3県居住者を対象にウェブアンケートを実施した。

得られた内容の分析結果から、「主観的健康感と環境認知量との関連」として、居住地周辺の主観的認知度が高いこと、憩える/思い出の/案内したい/家族と出かける/交流する場所を認知していることは、主観的健康感が良いことと関連していることを解明した。さらに、分析結果をふまえて、健康格差是正のための都市計画・まちづくりのあり方について検討した。

○ ガイド付きまち歩きの設計

越谷市旧日光街道越ヶ谷宿エリアにおけるガイド付きまち歩きの設計を進めた。目的1で収集・抽出した場所の文脈情報の編集と合わせ、まち歩き全体の時間、まち歩きルート、ガイドスポット、ガイド内容等について、先行研究や実施報告書から検討を進めた。

加えて、先行研究を元に、ガイド付きまち歩きにおける主観的健康感の変化について、精神的疲労・気分状態から計測する手法を検討した。

○ ガイド付きまち歩き実験

研究仮説の実証可能性の検討と設計したまち歩き実験の妥当性の検証ため、予備実験を2023年11月18日と22日に越谷市旧日光街道越ヶ谷宿エリア実施した。予備実験では、20代男女14名を対象とし、両日とも参加者を2チームに分け、複数の案内地点ごとにオーディオガイドを用いたガイドを聞く「ガイド付きまち歩き」と、その比較として、同じ案内地点でガイドは無いままガイドが付く場合と同じ時間滞在する「ガイド無しまち歩き」を体験してもらい、まち歩き前後の精神的疲労・気分状態の変化を計測した。

実験で得られたガイド付きまち歩きとガイド無しまち歩きの精神的疲労・気分状態の変化を比較した結果からは、ガイド付きまち歩きの方が精神的疲労・気分状態を向上させる傾向が示唆された。

予備実験の結果をふまえ、2023年11月11日に越谷市旧日光街道・越ヶ谷宿エリアでまち歩き実験を実施した。具体的には、条件を設けて募集した58名の一般参加者を対象に、「ガイド付きまち歩き」を体験するグループと、「ガイド無しまち歩き」を体験するグループに分け、被験者のまち歩きの前後での精神的疲労・気分状態を測定した。

得られたデータの分析から次の事項が明らかになった。まず、ガイドの有無に関わらず、まち歩き前後で気分状態が改善した。次に、ガイドの有無で比較すると、ガイド付きまち歩きの場合、ガイド無しまち歩きと比較して、空間認知量が増加し、気分状態の一部の尺度が改善した。さらに、男性はより気分状態が改善しやすいこと、40・50代と60・70代では、改善しやすい気分尺度に違いがあることが示唆された。よってこの実験からは、まち歩き、特にガイド付きまち歩きが、気分状態の改善に寄与することが実証された。

(3) 研究の主な成果—目的3:文脈情報を発信しやすい都市デザインのあり方の提言

○ 主観的健康感と空間認知との関係性

これまでの調査結果に加え、主観的健康感と空間認知との関係性を探るため、越谷市を含む首都圏郊外居住者を対象とする大規模Webアンケート調査を行った。その結果、健康感が良い回答者ほど、自宅付近において思い浮かべることのできる場所の数が多いことがわかった。また、その場所の意味・種類・情報源を分析した結果、主観的健康感が良い回答者は、思い浮かべる場所に対して、比較的多様な意味・種類を認識していること、同じく多様な情報源を有していることが明らかになった。

以上を踏まえ、これらの研究成果について、近年のまちづくりや都市計画に求められるWell-beingの視点から考察し、そこから主観的健康感を向上させる都市デザインのあり方をまとめた。

(4) 本研究のまとめと今後の展望

本研究でおこなったガイド付きまち歩き実験の結果としては、①まち歩きは気分状態を改善させる、②ガイド付きまち歩きが、ガイド無しまち歩き以上に気分状態を改善させることが明らかになった。ここからは、「ガイド付きまち歩き」が「主観的健康感」の向上に寄与するという点において、研究仮説がある程度立証されたといえる。よって、住民のWell-being実現を促す施策として、まち歩き、特にガイド付きまち歩きの促進が有効だといえる。また、主観的健康感と空間認知の調査からは、居住地周辺の主観的認知度の高さが主観的健康感を高める傾向にあることが明らかになった。

しかしながら、既往研究を参照すると、まち歩きの精神的疲労軽減・気分状態改善に対する影響は、実施場所や環境などの影響を受けやすい可能性がうかがえた。また本研究で実施した実験においても、当日の環境コンディション等の影響もうかがえた。今後、本研究で構築した場所の文脈情報の抽出、編集、共有の技術をふまえ、場所による文脈情報の差異（郊外住宅地や農山漁村など）を検討しながらガイド付きまち歩き実験を重ねることで、文脈情報を発信しやすい都市デザインの普遍性を高めることが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------